

平成22年4月1日発行

月刊 田中けん

第4期 vol.08 (通巻40号)

区議会「一人の会」無所属

弁護士の無料相談を受付中

詳しくは、03-3248-0888 (平日9時~18時)まで

ツイッター始めました。

<http://twitter.com/edoken>

目次	狙われた民主党／暴走する検察… 1
	暴走する検察…………… 2
	厚労省女性局長逮捕事件 …… 4

緊急出版 “外国人参政権”で **日本** がなくなる日

民主党が狙っている「外国人参政権付与法案」とは？
いったい何が問題なのか？ その危険性を徹底的に分析！

移民1000万人政策で日本は外国になる！
中国が合法的に侵略してくる！
そして、在日永住外国人も参政権では幸せになれない！

別冊宝島

特別寄稿
田母神俊雄
(元航空幕僚長)
「外国人参政権法案は我が国に対する間接侵略の第2段階」

インタビュー
金美齢 (評論家)
「本当の日本人に
なりたいたいだけに国籍と
参政権を与えなさい」

Q&Aで教えます！
百地章
(日本大学法学部教授)
「いからわかる
憲法違反の外国人参政権」

石平 (拓殖大学客員教授)
「中国人、中国政府の横暴に
加担する参政権付与」

鄭大均 (首都大学東京教授)
「在日コリアンにとっても、
突拍子もない参政権運動」

河添恵子 (ノンフィクション作家)
「フランスでも急増する
中国系自治区という、ガン細胞」

但馬オサム (文筆家)
「三人と戦後日本」

曙機関 (ジャーナリスト集団)
「人口170万人の村、青ヶ島に
外国人参政権が成立したら……!？」

田中けん (江戸川区議会議員)
「国境の島、対馬で
外国人参政権を考える」

井田正道 (明治大学教授) ほか
「外国人が選挙に与える影響」

激論！
外国人参政権、
各政党に聞く！

宝島社 お求めは全国の書店、インターネットで。 〒102-8388 東京都千代田区一番町25番地 03-3234-4621 (営業) <http://tkj.jp>

定価580円
978-4-7966-7674-8

検察特集

狙われた民主党／暴走する検察

日本の権力構造

日本の権力はどこにあるのか。民主主義なのだから、選挙で選ばれた国会にあると考える人は多い。その答えは間違いではない。

しかし、日本の権力は、もう一つ存在する。「官僚主義」と呼ばれる公務員たちが持つ権力だ。ただし、この権力は選挙で選ばれていない人間たちが握っている。つまり根本的に民主主義とは相容れない権力である。

これまでの自民政権は官僚の意のままに動く政権であった。そのため、「民主主義」と「官僚主義」は対立することなく、いやむしろお互いの足りない部分を補うように共生していた。民と官の対立が、我々国民には見えなかった。権力者同士の戦いとは、自民党と民主党に代表されるような、国会における与党と野党の戦いのみを指すことのように思われてきた。自民党に対して、野党が攻撃をする。そして野党が負ける。戦後、50年もの間、

国民は「最後には自民党が勝つ」というドラマをずっと見させられてきた。権力とは国会にあって、国会が全てだと思われてきた。

しかし、2009年に政権交代が起こる。これまで官僚と仲が良かった自民政権が倒れ、民主党を中心とする連立政権ができた。これで困ったのが官僚たちだ。自分たちの思うとおりに動かない政権ほど、官僚たちにとってはやっかいなものはない。そこで「官僚主義」は、これまで表に出てこない陰の存在だったことを止める。自分たちの意のままにならない「民主主義」を潰すべく、表舞台に登場してきた。そのような「官僚主義」の意向を反映した武闘集団、国家公認の暴力装置が検察およびその手足となって動く警察である。

これまでコップの中の争いに過ぎなかった国会での権力闘争は、権力がコップの外に出ることにより、ナベ位の少し大きな枠組みの中で争われることになった。

今までの権力闘争：

自民党 vs 野党第1党（社会党→新進党→民主党）

今現在の権力闘争：

民主党連立政権 vs 検察（官僚主義の武闘集団）

検察は本気になって、自分たちの意のままに動かない民主党政権を潰そうとしている。

検察とは誰

国民によって選ばれた議員は、機会あるごとに色々な場面で説明責任の負い、TVに出ては記者会見を開く。それに比べ、検察は検察という組織の陰に隠れ、顔と名前を持った人間が世間に登場して、何かを説明すると言うことはない。

本来、正当に権力を行使する者は、選挙で選ばれていようが、選ばれて無かろうが、顔と名前を国民に知らしめている。しかし、官僚主義は、誰が権力を行使しているのか、わかりにくいシステムになっている。巨大な組織の影に隠れて、ひたすら名前

と顔を隠して行使する権力に、本来の正当性はない。本来、「検察」という名の人間はいない。そこには検察の名で何かを語る人間がいるだけだ。今一度、検察とは誰のことを指しているのか、確認してみよう。

何でも聞くところによると、報道のTVカメラが入って、顔と実名が報道されることをとても嫌がる役所が、検察と警察らしい。

しかし、他の役所は、何か問題があれば、TVに出て、担当職員は自分の顔と名前をさらして、国民にしっかりと説明責任を果たしている。それならば、検察に巣くう住人たちにも、是非ご登場ただこう。私はここに、国民の知る権利を尊重して、検察の人間を公表する。

まずは検察とは、誰のことなのかを有権者に知っていただくことが、議論を進める第一歩だ。

【なお、この写真は、ネット上で公開されていた画像を使用しています。検察は、組織内の個人情報に極端に公開しません。よって、この様に不鮮明な写真しかないことを、ご理解ください。】



最高検
検事総長
樋渡利秋



最高検
検事
大鶴基成



最高検
次長検事
伊藤鉄男



東京高検
検事長
大林 宏



東京地検
検事正
岩村修二



東京地検
特捜部長
佐久間達哉



東京地検
特捜部副部長
吉田正喜



東京地検
次席検事
谷川恒太

暴走する検察

参考文献「週刊朝日」

小沢一郎不起訴までの道のり

2月4日、小沢幹事長は不起訴になった。これを検察における最低限の良識が働いたとして評価する識者もいる。

しかし、検察の現場では「上に潰された」との認識を持つ。上とは、樋渡利秋・検事総長と大林宏・東京高検検事長のこと。そこには、「不起訴の代わりに検察人事には手を突っ込まない」という密約があったのでは。そう、検察人事は検察による独自採用であり、国会といえども不可侵の領域なのだ。

またこのような説もある。小沢捜査に関して、伊藤鉄男・最高検次長検事は慎重派。大鶴基成・最高検検事は積極派。両者の対立により、最終的には、樋渡利秋・検事総長が決断して、不起訴になったという。これには、佐久間達哉・東京地検特捜部長も谷川恒太・東京地検次席検事も岩村修二・東京地

検検事正も、小沢逮捕を狙っていただけに、失望を隠しきれない。

この時期、検察にとっての最大の関心事は、樋渡利秋・検事総長の後任を大林宏・東京高検検事長にきちんと引き継げるかどうかだけだという。日本における二つの大きな権力は、お互いの利益のために、痛み分けに応じたのだ。これで裏取引は完成した。

2月4日の記者会見で小沢幹事長は「検察の公正な捜査の結果が出た」このように発言し幕は閉じた。

検察の何が問題だったのか

不起訴直前まで、検察は強気だった。しかし、そもそも小沢逮捕には無理があった。

事件の焦点は、小沢幹事長の資金管理団体「陸山会」の土地購入資金4億円の前原資に「裏金」が含まれていたかどうかだった。

しかし、仮に裏金であったとしても、当時野党だった小沢幹事長に職務権限は無かった。これでは贈収賄は成立しない。小沢氏の働きかけがあったとしても、その立証は難しい。「脱税」を証明するのも更に困難だ。

これまで悪質性の根拠と言われてきた「4億円の原資のうち5千万円は水谷建設からの裏金」という部分が証明できなければ、石川議員を逮捕する必要性があったかどうかも怪しくなる。

検察の誤算はどこにあったのか。

そもそも今の検察は、基礎捜査をしっかりやっていない。関係者が否認しても立件できるだけの証拠固めができていない。相変わらず自白に頼った捜査をしているので、シナリオが崩れると対応できない。見込み捜査によるずさんなやり方が、今回のような結果を招いた。何が何でも小沢を有罪にしないと気が済まないという検察が描いたシナリオに元々無理があったとは、一度暴走した現場の検察にはわからなかった。

女性を監禁し、恫喝する検察

石川議員が逮捕されるにあっては、何の罪もない2児の母親である女性秘書が10時間近くも監禁され、恫喝を繰り返されていた。

保育園で待っている3歳と5歳の子どもたちを迎えに行きたいと懇願する母親に対して、担当の民野健治・東京地検検事が「何言っちゃってんの。そんなに人生、甘くないでしょ」

そう言い放ち、精神的なダメージを母親に与えている。

週刊朝日は、このような報道に対する検察からの反論も掲載しようと取材を申し込むが、「司法記者クラブには属さない週刊誌には答えられない」そう言って、取材を拒否している。

その後、検察からは抗議書なる反論が、週刊朝日宛に送られてくる。

その内容は以下の3点だけである。端的に、①～③に要約する。

①当該検事は、女性秘書に対し、「何点か確認したいことがある」旨を告げて来庁を依頼した。

これに対する反論はこうだ。

来庁を依頼した発言は事実だが、そこには押収品の返却も含まれていた。しかし、それは結局ウソだった。

また来庁を依頼したとあるが、13時45分と時間指定による有無も言わせない出頭要請だった。

②夕刻、女性秘書から子どもの迎えもあるので帰りたい旨の申し出があった。当該検事が、「家族の誰かに代わりに迎えに行ってもらえませんか」と尋ね

たところ、夫に電話をかけ、その結果、子どもの迎えの都合がついたから事情聴取が続けられた。その際、女性秘書は、子どもの迎えだけは行かせて欲しいと発言したり、取り乱したりしたことはない。

その反論。

検事が、「家族の誰かに代わりに迎えに行ってもらえませんか」と尋ねたとあるが、事実は真逆だった。これは、自分が迎えに行ってもあげられないと悟った母親からの依頼だった。それも繰り返し哀願して認められた結果の話である。夫へ電話しても、夫は仕事で子どもを迎えに行けなかった。最終的には、別の親族が迎えに行っている。よって、子どもの迎えの願いは叶わず、検察が無理矢理、女性秘書を引き留めたことになる。女性秘書は、夫が仕事で迎えに行けないとわかったとき、パニック状態に陥り、手が震え、過呼吸症候群になってしまった。

③当該検事は、本件事情聴取中、終始、冷静かつ丁寧に対応しており、「恫喝」、「監禁」、「拷問的」などと評されるような言動は一切とっていない。

その反論。

だまし聴取が始まったのが13時45分前後。女性秘書は繰り返し外部への連絡を求めているが、民野健治検事はこれを拒否している。ようやく電話連絡が認められたのが夕刻だった。弁護士への連絡も、解放直前の22時半になって初めて許されている。

普通に考えても、これだけ長時間にわたる事情聴取が、本人同意の下に行われていたとは到底考えられない。本人不同意でありながら、検察によって「監禁」されていたと見るのが妥当だ。

弁護士への電話によって、長時間拘束されていることを知った弁護士が東京地検に電話をして、女性秘書は解放された。

夕刻、民野健治検事は無言の秘書に対して「本当のことを言わないから、帰れないんだよ！」

このように声を荒げている。大声を出さないように願うが、かなわなかった。民野健治検事は怒鳴り続けた。

「いいんだよっ！ とにかく、本当のことを言えいいんだよ！」

精神的ショックを受けた女性秘書は、その後、病院で診察を受け、未だに完全な職場復帰を果たしていない。

この事件を報道しない大手マスコミ

週刊朝日の取材を拒否した検察の抗議に、本来ならば応じる必要はない。なぜならば「公権力の取材拒否は、反論権の放棄とみなす」これが世界のジャーナリズムの原則だからだ。

それにしても、女性秘書に対する検察の「犯罪行為」を報じる新聞・テレビが無いのはなぜか。もしここで新聞・テレビがこのニュースを取り上げると、それが検察批判につながり「共生関係」にある記者クラブ自体の自己否定になってしまう。記者クラブとは、検察など各種団体の配慮によって設けられた記者室を拠点拠点にしている特定の報道機関の記者たちが構成する組織のこと。記者クラブは独占的に情報を得られるため、他のメディアに対しては排他的振る舞う。この既得権が崩れることを大

手マスコミは嫌い、検察批判をしないことが不文律になっている。

記者クラブがあることで、大手マスコミは苦勞せずに、大量の検察情報を得ることができる。検察は特定のマスコミにだけ自分たちが都合の良い情報を提供することで、世論をコントロールすることができる。ここに検察と大手マスコミの共生関係は成立する。「記者クラブ」により官製情報を無批判に垂れ流す体質が、時に、政治よりも、官僚よりも、マスコミが一番悪いと言われる根拠になっている。

厚労省女性局長逮捕事件

参考文献「週刊朝日」

村木厚子・厚労省元局長が虚偽有印公文書作成などの罪を問われている郵政不正事件で、証明書偽造の実行犯とされる上村勉（かみむらつとむ）元係長が、村木被告の関与を全面否定した。

一貫して無罪を訴えている村木被告の公判で、上村被告が証言台に立った。

「検事は自分の言っていることを全然調書に書いてくれなかった。調書はでっち上げ」

このように大阪地検特捜部の取り調べを批判した。「偽の証明書を作成し、交付したのは、すべて自分で決めて自分一人で実行した。村木被告は関わっていない」

この様にも証言している。

この証言は、検察が主張するストーリーを真っ向から否定している。

検察は、共犯とされる倉沢邦夫被告が、石井一参院議員に厚労省の塩田幸雄部長（当時）への口利きを依頼し、指示を受けた村木被告が上村被告に作成を命じた「厚労省の組織的犯罪」であるという認識だ。これが否定された。

ではなぜ、上村被告は村木被告の関与、石井議員の口利きなど、検察の筋書に沿った供述調書に署名したのか。

それには、上村被告自身が書き綴った「被疑者ノート」という一種の日記が手がかりになる。上村被告を取り調べたのは、国井弘樹検事だ。そのノートには、当初、自身の単独犯行を自白したにもかかわらず、「検察はどうしても村木と私をつなげたいらしい。私の供述は他の関係者の供述から浮いている」

などと書かれている。

「上村さんだけがウソをついている」

そのように国井検事から詰め寄られ、

「上村さんは全然覚えていないから、他人の力を借りるしかない。多数決でまかせて」

とでっちあげ調書作成に同意するように強要されたと書いてある。

更に、勝手にストーリーを作り上げようとする国井検事の調書について、

「検事のいいところ取り、こういう作文こそ偽装ではないか」

と訴えている。上村被告の独白は続く。

「調書の修正はあきらめた。早く両親の元に帰りたい」

時には、拷問の可能性も示唆される中であって、身の危険を感じた上村被告は、村木被告や石井議員が関わった「厚労省の組織的犯罪」とする、記憶にない調書にサインをしてしまった。

上村被告は、保釈間近に、再び村木被告の関与を否定したが、

「話がこじれたら再逮捕で保釈されないかもしれない」

検事がこのように被告を脅して、裏取引の調書にサインをさせたという。これが特捜部が得意とする「虚偽の自白」である。

検察がなぜここまで強引な捜査をするのか。それは2009年6月に村木被告らを逮捕し、当初からこの事件に、民主党の国会議員が関わっているよう、世論に印象づけたかったからだ。小沢事件同様、民主党による「政権交代」の阻止を検察が目指して仕組んだとしか考えられない。

高速道路の無料化

脱官僚・天下りの根絶

人口過密の解消



江戸川区
議会議員

田中けん

自宅事務所

〒132-0021 江戸川区中央4-25-14
☎ 03-3248-0888(平日9時~18時)
E-mail info@t-ken.jp

プロフィール

1966年 江戸川区生/松江三中卒 墨田川高校卒 千葉大学教育学部卒
○1995年4月 江戸川区議会議員選挙 (2789票・41位)当選
○1999年4月 同選挙 (4282票・16位)当選
●2001年6月 東京都議会議員選挙 (12394票・8位)落選
○2003年4月 江戸川区議会議員選挙 (4103票・15位)当選
○2007年4月 同選挙 (3883票・25位)当選

禁煙地方議員連盟代表幹事、ホームヘルパー2級、スペイン語を勉強中

www.t-ken.jp